

地域連携活動における意識ギャップと 評価指標に関する一考察

神戸大学地域連携推進室 内平 隆之
神戸大学自然科学系先端融合研究環 中塚 雅也
神戸大学大学院農学研究科 加古 敏之

近年、大学の新たな役割として、社会貢献が強調されるようになった。農学分野も例外ではなく、学内に、産学連携や地域連携部門を設置するなど、組織的な取り組みを推進する大学も数多く出てきた。しかしながら、自らが採用した地域連携活動の成果やプロセスを、社会的責任の観点から、どのように評価すれば良いかについてのガイドラインは未確立である。特に、大学と地域が連携協定を締結する動きに見られるように、地域連携活動の中心は、従来の農村のニーズと大学のシーズの個別的マッチングのみならず、長期的なコミットメントの中で、農学の力を有効に機能させ総合的な問題解決・価値創造のシステムづくりに軸足を移してきている。このような地域連携システムは、研究者が研究対象へ接近する敷居を下げるメリットがある一方で、なし崩し的な要求過多による連携疲れを生む危険性を孕んでいる。地域連携活動に投資できる大学側の資源は有限であり、限られた資源を、取り組むべき課題に適正に配分するためにも評価指標を確立する必要がある。

そこで、本論文では、農学分野における地域連携活動の評価・改善サイクルを構築することを目的に、地域連携活動の評価の枠組みと、その指標のあり方を考察することを課題とする。

研究の方法は以下の通りである。第1段階として、CSRの評価研究やNPOの評価研究をレビューし、それらの大学の地域連携活動への適応の妥当性を検討した。これに基づき、農学分野における地域連携活動の評価の枠組みと指標の仮説構築を行った。第2段階として、神戸大学大学院農学研究科の地域連携活動の各ステークスホルダー（学生、教員、行政、NPO、生協、農協、農家）の意向をヒアリングし、仮説との共通点とギャップを明らかにした。第3段階として、意向ギャップに基づき、地域連携活動の評価の枠組みと指標の妥当性を再検討し、地域連携活動に関する実用的な評価手法のあり方を論じた。

その結果、地域連携活動の質を上げていくには、「大学が社会的責任を果たしているか」「同時に教育・研究にプラスの効果をもたらしているか」「対応する社会的取り組みは、他の事業体と競合しない大学だけが対応できるニーズであるか」の3つの枠組みを中心に、内外から評価する必要性が整理された。

また、これらを指標として、無数にある社会的課題の中から、長期的にコミットすべき地域連携活動を戦略的に選択することが望まれる。このような地域連携活動に適切な推進体制としては、従来の受動的（社会側の要請）もしくは、恣意的（研究側の要請）な一方向からの要請的対応を超えて、大学と社会のニーズを練り上げる双方向のコミュニケーションの仕組みを制度化することが必要と考えられる。